様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３６６７

研究課題名（和文）仏旧植民地出身移民（の子孫）の抵抗ーーインターセクショナルな連合の不／可能性

研究課題名（英文）Resisting the matrix of domination : French descendants of postcolonial migrants in search of coalitions

研究代表者
田邊　佳美（TANABE, YOSHIMI）

東京外国語大学・総合国際学研究院・准教授

研究者番号：４０８６９８８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、（1）非均一的なマイノリティ集団が多様なアクターの交差する社会運動空間で「連合」（連帯）を実現する不／可能性を、2012年から2019年にかけてパリ都市部郊外の長期調査で、フランスの旧植民地出身移民とその子孫を中心とした社会運動空間で収集したデータを用いて、「独立性」「政治的連帯」「予示的政治」「対抗的公共圏」の概念に依拠しつつ理論的に考察した。さらに、（2）二次資料と現地調査（2022年度と2023年度に実施）で得たデータから、「連合」（連帯）における「マイノリティ（化された）知」の位置付けを、事例と理論の両面において分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、マイノリティの政治における権力関係の問題に対して、フランスの事例に依拠した実証的分析と理論的考察から、実質的な「連合（連帯）」の障害・条件・契機を例示すると同時に、「対抗的公共圏」や「予示的政治」などの分析概念の精緻化に貢献し、マイノリティが社会正義を求めるなかで創造する知の意義を明らかにした点にある。世界的規模での経済格差や不平等が指摘され、社会内部の多様性が自明となっている現代社会において、マジョリティ／マイノリティ関係の複層的かつ複雑な理解は欠かせない。本研究の社会的意義は、公正かつ平等な政治・制度や社会関係の創造に向けた議論の材料を提供する点にある。

研究成果の概要（英文）：This study has two main achievements: (1) it theoretically examines the (im)possibility for minorities to foster "coalition" ("solidarity" in more general terms) within social movement spaces intersecting with various actors. Based on ethnographic research conducted between 2012 and 2019 in a Parisian suburb, focusing on French minorities, specifically French (descendants of) postcolonial migrants, it introduces a nuanced analysis incorporating the notions of "autonomy," "political solidarity," "prefigurative politics," and "subaltern counterpublics." Additionally, (2) based on a review of prior research and data obtained from fieldwork conducted during 2022-2023 and involving both activists and researchers, the study analyzes the implications of "minority and minoritized knowledge" within "coalition," considering both empirical cases and theoretical aspects.

研究分野：国際社会学

キーワード：旧植民地出身移民　フランス　インターセクショナリティ　連合／政治的連帯　対抗的公共圏　予示的政治　マイノリティ知　社会運動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年フランスでは、戦後の旧植民地出身移民とその子孫による運動史上に新たな世代の登場が指摘されている（Talpin et al. 2021）。新たな世代は、2000 年代半ば以降に登場し、運動理念と組織形態において一線を画している。一方では、移民や人種マイノリティに発言機会を譲らず「代弁」する「白人」「左派」の運動家や政党に対する異議申し立てから、マジョリティ／マイノリティの権力関係を問題化し、「当事者（concerné-e）」性に基づく理念と組織の「独立性（autonomie）」を主張する。他方で、「当事者性」を重視するゆえに、交差する権力関係（人種・ジェンダー・階級などの交差性）が問題化され、それまで集合的に捉えられていた「旧植民地出身移民とその子孫」が、非均一的な集団として捉え直されるようになった。こうして、旧植民地出身移民とその子孫の「集団」としての「当事者性」は、流動的であると同時に後天的に構築／獲得されるものとして定義し直されつつある。そこで浮かび上がるのが、「当事者」間の「連合（coalition, alliance）」（一般的には「連帯」）という課題、すなわち多様な「当事者」間の「連合」を可能とする戦術、逆に「連合」を妨げる障壁は何かという問いである。

２．研究の目的

上記の研究背景から、本研究は、仏・旧植民地出身移民とその子孫が、多様なアクターの集まる社会運動空間で「連合」を実現する可能性／不可能性、及びその具体的な戦術を、アクション・リサーチの手法で明らかにすることを当初の目的とした。しかし、2020 年度以来の感染症流行下で現地調査が叶わないなか、研究目的・計画を以下のように再設定した。

まず、(1)「連合」の不／可能性をめぐる理論的な精緻化を第一の目標とした。同時に、「連合」を大きく左右する要素として、(2) 2000 年代半ば以降のフランスの社会運動空間における「マイノリティ知（minority knowledge）」（Bilge 2015, 2020）の分析を目指した。旧植民地出身移民やその子孫の運動における新たな世代、なかでも女性や性的マイノリティは、社会問題の「当事者」として、主体的に社会問題（相互連間するものとしての反レイシズム・フェミニズム・性的マイノリティの権利の問題）を再定義し、公共空間（公共圏）に提起してきた。本研究では、仮説的に、その戦術の核として「マイノリティの知」を位置付け、その創造・普及・受容における抵抗の様相を明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

(1)「連合」をめぐる理論的精緻化に向けては、主として文献調査を行い、過去に収集したデータを再検討した。とりわけ、ベルフックスの「政治的連帯（political solidarity）」（bell hooks 1984 : 43）、N.フレイザーの「サバルタンの対抗的公共圏（subaltern counterpublics）」（Fraser 1992 : 67）、D.グレーバー（ら）の「予示的政治（prefigurative politics）」（Graeber 2004 ＝ 2006 : 19）概念をフランスの事例に新たに応用することで、事例の理解を深めると同時に概念の精緻化を試みた。分析データは、筆者が 2012～2019 年に仏パリ都市部郊外の長期調査で収集した民族学誌的調査（参与観察、聞取り調査、資料調査）に依拠した。

(2)「マイノリティ知」の分析においては、一次・二次資料の文献調査、および現地での質的調査（2022 年度と 2023 年度のみ）を用いた。2020 年度・2021 年度は、社会科学者らが執筆した「人種」や「インターセクショナリティ」をめぐる学問的・政治的な緊張関係を主題とした二次資料の収集と分析に基づき、「マイノリティ知」に関わるアクターを具体的に特定し、アクターによるオンライン上での発信と出版物を一次資料として収集した。また、2023 年 3 月、2024 年 1 月と 3 月に現地調査を実施し、2000 年台後半以降の反レイシズム・フェミニズム・性的マイノリティの権利運動をつなぐアクター（計 6 名）への非公式な聞取り調査および資料収集を行なった。さらに、パリ第 8 大学・LEGS 研究所の N.ゲニフや T.ドールらとは、現地調査の実現を待つ間に「マイノリティ知」をめぐる国際共同研究（共著書および共著論文の執筆）を進め、研究期間後半の現地調査にあたっては一部の調査協力者を紹介してもらった。

４．研究成果

以下では 2 つの研究目標に関わる 4 点の研究成果を挙げたい。

(1)「連合」をめぐる理論的精緻化による研究成果

①サバルタンが奪われた〈声〉を取り戻す条件（研究成果 1）

筆者が 2012 年～2019 年にかけて調査を実施したフランス・パリ都市部郊外の自治体では、2002 年から 2016 年頃まで、地域の高齢移民女性たちが積極的に関わると同時に、多様な参加者が行き交う社会運動空間が存在していた。この運動空間をめぐって「独立性」の観点からの再検討が明らかにしたのは、運動空間における政治的・精神的独立性の追求が「連合」の一条件として機能し、現代フランス社会で最も脆弱な社会的位置にある高齢移民女性たちが、人種・階級・ジェンダー・国籍・言語など多くの点でより恵まれた参加者から「代弁」されることなく積極的に発言し、運動空間の意思決定に等しく参加することを可能にしていた点である。この研究成果

は、2021 年研究報告「フランスの旧植民地出身移民と言語――声を取り戻す反差別の実践」および 2022 年の論文「フランス・旧植民地出身移民女性の抵抗と言語――〈声〉を取り戻すための演劇制作」として発表した。

②連合／政治的連帯を可能にする対抗的秩序（研究成果 2）
「連合」の戦術をより包括的に検討した成果が、2022 年 6 月の第 70 回・関東社会学会大会での研究報告と、それを発展させた論文「サバルタン・マイノリティ集団・政治的連帯――仏・旧植民地出身移民女性を中心とする対抗的公共圏の戦術」である。先述の運動空間に関して、「政治的連帯」・「対抗的公共圏」・「予示的政治」という 3 つの概念に依拠した分析から浮かび上がったのは、公的言説と隠された言説から成る、運動空間で「連合」を成立させるための対抗秩序だった。関連する 2023 年 10 月の国際ジェンダー学会・分科会での研究報告「仏・旧植民地出身移民女性を中心化する予示的政治の空間――政治的連帯の隠された戦術」の報告と討論では、この研究成果が、「連合」＝「政治的連帯」の観点を通すことで「対抗的公共圏」概念の今後の発展に寄与し得ること、また最も脆弱なマイノリティの政治参加を考える上で、「予示的政治」概念を経由することの意義を確認することができた。

(2)「マイノリティ知」をめぐる研究成果
①フランスにおける「マイノリティ知」と社会運動の交差（研究成果 3）
先述のように、2000 年代以降の旧植民地出身移民とその子孫による運動では、「当事者性」や「独立性」、さらには「人種」に関わる語彙が多用される。当事者と非当事者を区別するアプローチは、「代弁」への異議申立てのプロセスで登場したが、ここで当事者性の根拠となるのが、戦略的本質主義的な立場からの人種集団のカテゴリー化である。この戦術に依拠し、例えば「黒人」として自己定義することで、レイシズムを被るマイノリティ／当事者としての発言権を主張すると同時に、マジョリティである「白人」に対して、レイシズム経験の「代弁」を拒否する。反レイシズムにおけるこのような立場は、個人の属性や差異を意図的に無視する普遍主義のフランスの主流政治・社会秩序への不服従を意味する。同時に、このような普遍主義への対抗は、移民や人種マイノリティの運動、反レイシズム運動に限った現象ではない。2000 年代半ば以降、普遍主義に異議を申し立て、戦略的本質主義の立場からマイノリティ政治を展開する動きが、反レイシズム運動、フェミニズム運動、そして性的マイノリティの運動において相互に連動する形で表出してきた。このような抵抗はマイノリティ研究者と活動家が主導し、社会運動とアカデミア界を結びつけながら「マイノリティ知」の転回を引き起こし、アカデミア界にも変革を迫ってきた。この研究成果は、2024 年 9 月に国際ジェンダー学会で報告予定である。

②「マイノリティ知」をめぐる理論的・概念的考察（研究成果 4）
S.ビルジュ（bilge 2015, 2020）が提起した「マイノリティ知（minority knowledge）」概念を起点に、パリ第 8 大学の T.ドールと進めた国際共同研究からは、マイノリティ知の創造・普及・受容における、マジョリティの関与や立場性を考慮する必要性が浮かび上がった。既存の政治社会秩序／知的秩序に抵抗する新たな概念や語彙は、マイノリティのみが創り上げるとは限らない。マジョリティが、主流の政治・社会秩序を批判的に捉え返す思想もまた「マイノリティ化される（minoritized）」という点において「マイノリティ知」と位置付けられる。他方で、マイノリティが社会的正義を求める闘争の範疇で創造した知を、マジョリティが占有（appropriate）し、脱政治化／脱色する（blanchiment）問題も、すでに指摘されてきた（Bilge 2015, 2020）。このように、マジョリティが「マイノリティ（化された）知」の創造にどう関わるのか、その立場性をどう考えるかは、今後の「マイノリティ知」をめぐる重要な争点と言える。この研究成果は、2024 年度中に共著論文として投稿を予定している。

〈引用文献〉
bell hooks, 1984, *Feminist Theory: From Margin to Centre*, Cambridge: South End Press.
Bilge, Sirma, 2015, « Le blanchiment de l'intersectionnalité », *Recherches féministes*, 28(2) : 9–32.
----, 2020, "We've joined the table but we're still on the menu: Clickbaiting diversity in today's university", John Solomos eds., *Routledge International Handbook of Contemporary Racisms*, New York: Routledge, 317-331.
Fraser, Nancy, 1990, "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy," *Social Text*, 25/26: 56-80.
Graeber, David, 2004, *Fragments of an Anarchist Anthropology*, Prickly Paradigm Press（＝2006『アナーキスト人類学のための断章』高祖岩三郎訳、以文社）.
Talpin, Julien, Hélène Balazard, Marion Carrel, Samir Hadj Belgacem, Sümbül Kaya & Anaïk Purenne, 2021, *L'épreuve de la discrimination : Enquête dans les quartiers populaires*, Paris : PUF.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 田邊佳美	４．巻 25
２．論文標題 サバルタン・マイノリティ集団・政治的連帯――仏・旧植民地出身女性を中心とする対抗的公共圏の戦術	５．発行年 2023年
３．雑誌名 クアドランテ	６．最初と最後の頁 55-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/125089	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田邊佳美	４．巻 春
２．論文標題 アブデルマレク・サイヤード――社会を突き動かす思想	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Pieria	６．最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田邊,　佳美、タナベ,　ヨシミ、TANABE Yoshimi	４．巻 47(2021)
２．論文標題 フランス・旧植民地出身移民女性の抵抗と言語――〈声〉を取り戻すための演劇制作――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ふらんぼー = Flambeau	６．最初と最後の頁 103～121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/117071	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田邊佳美	４．巻 春
２．論文標題 移民研究とジェンダー研究の接合――越境知が開く新たな地平	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Pieria	６．最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 田邊佳美
2．発表標題 マイノリティと/が連帯する――フランスの旧植民地出身移民女性らが作る抵抗の空間
3．学会等名 関東社会学会第 70 回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 田邊佳美
2．発表標題 フランスの旧植民地出身移民と言語――声を取り戻す反差別の実践
3．学会等名 ワークショップ・フランコフォニー――文化・社会・ことば
4．発表年 2021年～2022年

1．発表者名 田邊佳美
2．発表標題 Terrain suspicieux et malaise comme declencheur d’ouverture
3．学会等名 Ateliers du LEGS（国際学会）
4．発表年 2021年～2022年

1．発表者名 田邊佳美
2．発表標題 2.仏・旧植民地出身移民女性を中心化する予示的政治の空間――政治的連帯の隠された戦術
3．学会等名 国際ジェンダー学会（国際移動とジェンダー分科会 第2回研究会・公開）
4．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関